

破壊的カルト脱会者の心理過程に関する研究

- 適応的と見られる脱会者の語りに基づくモデル構築の試み -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
廣瀬 太介

破壊的カルトとは、特定の個人や思想、物事に極端な傾倒や献身を示し、倫理にもとる意識操作や強制的な説得とコントロールの戦術を用い、メンバー、家族、地域社会に実害を与えるかその可能性をはらむようなリーダーの目的を推進しているグループや運動のことである。これまで、このような明らかに欺瞞を行う団体に入信し活動する者の心理は、行動コントロール、思想コントロール、感情コントロール、情報コントロールを行って個人のアイデンティティを破壊して、それを新しいアイデンティティに置き換えてしまうシステムであるマインド・コントロールという概念で説明されてきた。ところが、近年、脱会をしても、抑うつ不安傾向、自信喪失、自責・後悔、社会化・親密化困難、家族関係の不和、異性との接触恐怖、情緒不安定、心身症的傾向、隠匿傾向、教団に対する怒りなどの症状があらわれ、社会への適応が困難であることが明らかとなり、脱会後のケアと社会復帰の支援のために臨床心理学的援助が求められるようになってきている。これまで主として脱会者の支援を行ってきたのは宗教者や弁護士らであるが、彼らは海外の文献や経験者から試行錯誤しながら学び、ぶっつけ本番さながらに対応してきた。そのため、本邦では、脱会者に対して臨床心理学的な援助をする際、参照枠となるような知見が乏しい状態にある。そこで本研究では、アセスメントと介入を行う際に参照できるモデルを作ることを目的とした。

研究の方法として、まず、インフォーマントを募ることを目的としてフィールドワークを行い、7名に対してインタビューを実施した。次に最も適応的と思われる1名を今回の研究の分析対象として事例研究を行うこととした。分析に当たっては、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、複線経路・等至性モデル、対話的自己の3つを参照してトライアングレーションを行った。

グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく分析の結果、〔どうしたらいいか分からない状態〕、〔迷いながらの宗教活動〕、〔組織への献身〕、〔見直すことができない生き方〕、〔受け入れ難い現実の受容〕、〔生き方の問い直し〕、〔何とかやっていける生活〕の7つの段階を脱会者は経ると認められた。複線経路・等至性モデルに基づく分析の結果、カルトに入信して活動するという選択をするに当たって、【組織に押し込む力】と【組織に引き込む力】という二つの力が働くことと、カルトを脱会し社会復帰するという選択をするに当たって、【社会に引き出す力】が働くことが明らかとなった。対話的自己に基づく分析の結果、周囲に対して否定的なイメージを持っていた「未信者としての私」が、組織に対して肯定的なイメージを持つ「信者としての私」となった後、周囲に対して肯定的なイメージを持つ「脱会者としての私」となることが明らかとなった。